

■搾乳牛が喜ぶ稲WCS作りを目指して

10月は、広島県ではWCS用稲の収穫最盛期です。2年続けて天候に悩まされましたので、今年こそは順調に進むことを願っています。

搾乳利用を目的とする稲WCSに、特に求めていることは、①籾重割合が小さいこと、②消化率が低いこと、③糖含量が低いこと、です。

①は、栽培技術(施肥の時期と量)で解決できることがはっきりしています。②は、刈り遅れにならない(出穂から60日を超えない)こと、③は、早刈りしない(出穂から30日経ってから刈る)こと、といった単純な技術でコントロールできます。しかし、実際の収穫場面では、③の早刈りは防ぐことができて、②の刈り遅れの回避を徹底することは容易ではありません。その主因は天候です。

そこで、悪天候が理由で収穫時期が遅くなったとしても、消化率が低くならないことを期待できるかもしれない、極晩生の品種ができました。それが、今年度、新たに品種登録された「つきことか」です。

■つきことか

縞葉枯れ病抵抗性が付き、九月から十月にかけて出穂する(九=このつ、十=とお)ことから、「つきことか」と命名されました。

この品種を作った農研機構によると、出穂期は、たちすずかよりも20日以上遅い9月末です。収量は、うまく作れば「たちすずか」よりも乾物で2割増収が期待できるようです。さらに、「たちすずか」と大きく異なる点として、晩植(7月田植)しても籾重割合が増えないことも期待できるようです。

今年、「つきことか」は、庄原市七塚町と三次市三和町で試験的に栽培しています。出穂は、三次試験圃が9/26、庄原試験圃が10/1でした。庄原試験圃では、隣接田の「たちすずか」より20日、「つきすずか」より27日も遅い出穂です。写真は、10月3日時点の生育状況です。「つきことか」は、「たちすずか」「つきすずか」よりも背が高く、籾が少ないことがわかります。すなわち、籾重割合が非常に低いということです。

庄原試験圃では、11月から12月にかけて、籾や茎葉の変化を継続して観察する予定です。試験栽培中の登録前新系統と合わせて、評価を行いたいと考えています。

ただし、問題が一つあります。9月末出穂という極晩生なので、県内では沿岸部の温暖地以外では十分に登熟しません。現在、「たちすずか」「たちあやか」の採種をしている県内のほとんどの地域では、採種が不可能だと考えています。

県内採種ができない場合は、全国草地畜産種子協会から購入することになりますが、本体価格が1kg約1,400円と、「たちすずか」の約850円に比べると6割以上も高額です。10アールあたりで、1,650円(播種量3kg)の支出増となります。収量で考えると0.5ロール分に相当するので、採用には考慮を要します。ポイントは、収量と11月収穫のWCS

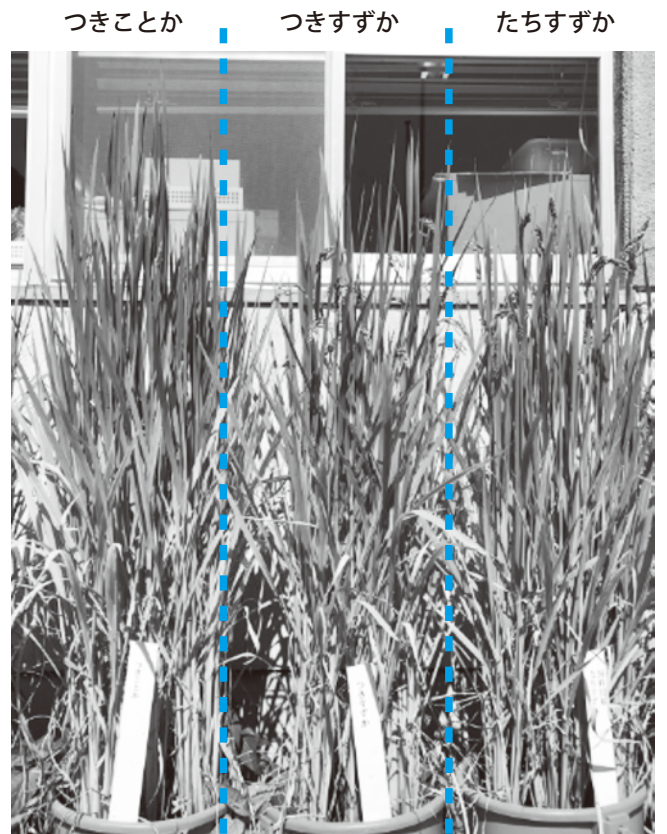
品質がどれだけ優れているかです。庄原試験圃では、12月まで観察を継続する予定です。

■つきすずか

今年から全国的に作付が広がり始めた「つきすずか」は、「たちすずか」の直系子孫で縞葉枯れ病に抵抗性のある品種です。広島県内でも、30ha程度栽培されています。幸い、現在のところ、広島県では縞葉枯れ病の心配は要らないようですが、全国的には深刻な問題として捉えられており、来年度作付用の全国草地畜産種子協会取扱量は、「たちすずか」を逆転してWCS用稲の主力品種となっています。

庄原試験圃では、「たちすずか」よりも1週間早く出穂して、草丈が高く、草姿は直立性がより強いといった違いが観察できています。こういった特徴を生かして、多肥栽培を行い、大きく(背高く)作って、株元を高く刈り取れば、より消化性の良い、かつ、品質劣化の原因である泥の混入がより少ないWCSが調製できる、しかも収量は「たちすずか」に比べて下がることも期待できます。

具体的な収穫技術などの利用方法は、今年の実績を参考にして検討します。一方で、全国動向を見据えて、種子生産は県内でも今年から始めているので、来年はより広い面積で栽培できると思います。来年は、「たちすずか」と同等以上の飼料効果を引き出して、より使い易い飼料とすべく、耕種・収穫・畜産の3者の連携が引き続き重要になってくるでしょう。



※畜技が行っている管理技術について詳しく知りたい方は、0824-74-0332(技術支援部)までご連絡ください。